広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報ＸＸⅣ
広島大学考古学研究室紀要　第２号、2010年、75 ～ 93頁。

海の祭祀遺跡－舞鶴市千歳下遺跡－（２）

野島　永・松波静香・松本達也

１．京都府舞鶴市千歳下遺跡の出土遺物紹介の経緯

千歳下遺跡は京都府舞鶴市字千歳、若狭湾を望む大浦半島の海浜部に位置する。当遺跡は昭和63年に舞鶴市教育委員会吉岡博之氏が行なった市内遺跡分布調査によって周知された。その後、平成11年に計画された市道改良工事にともない、舞鶴市教育委員会によって緊急の発掘調査が行なわれた。発掘調査の結果、古墳時代中期の祭祀遺構が検出され、獣帯鏡片や銅釧などの青銅器をはじめ、700点以上におよぶ鉄製品や鉄片類、1,000点にもなる玉類や石製模造品などが出土した（野島・加藤・脇山・荒平 2008）。

平成12年には発掘調査の担当者であった舞鶴市教育委員会の松本から、当時京都府埋蔵文化財調査研究センターに勤務していた野島に千歳下遺跡出土資料の図化整理についての依頼があったが、諸般の事情から実現にはいたらなかった。出土遺物はこれまで現地説明会で公開されたのみであり、調査終了後、充分な整理作業を行なう機会もなく、調査成果は未公表のままとなっていた。その後、広島大学大学院文学研究科考古学研究室が出土遺物および調査記録の一部を舞鶴市教育委員会から借出することが可能となった。今回はこれら出土遺物のなかでも土器・土製品等について紹介したい[(1)]。

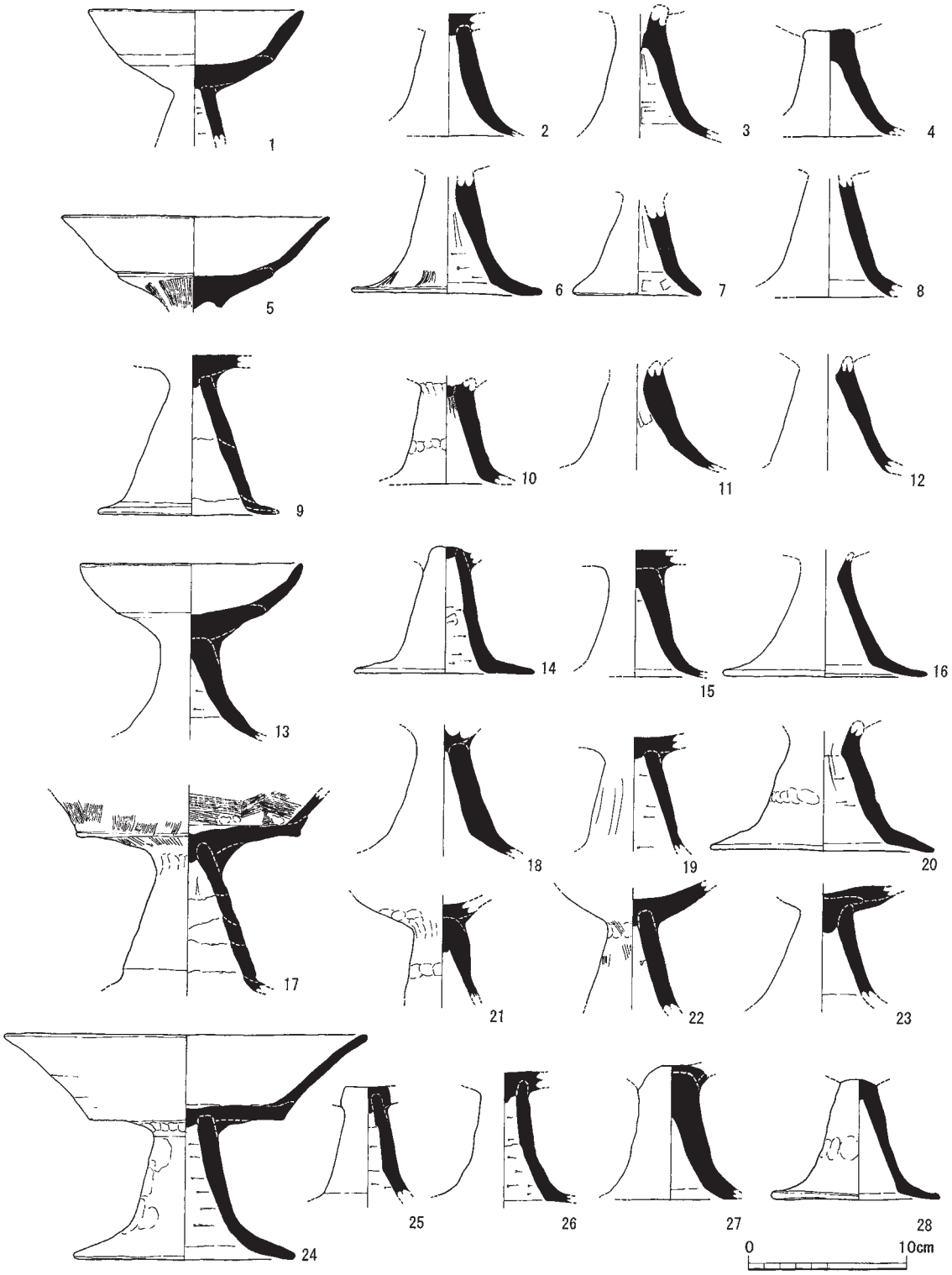
なお、2007年には宮津市の丹後一の宮、元伊勢籠神社の境内東側海浜部に広がる難波野条里遺跡の発掘調査が行なわれ、古墳時代中期の土器類が大量に出土した。とくに「コ」字状の浅瀬に配置された土器群 SX200は海浜に位置する祭祀遺構として認識された（石尾・引原 2008）。このため、今回の報告では、松波と野島が土師器高坏と小型丸底壺について、難波野条里遺跡出土土器などとの比較検討を実施した。

２.千歳下遺跡出土土器の概要

土師器

高　坏（第１・２図１～42）　高坏は最も多く出土した土器である。そのうち42点を図化した。１から６はＡトレンチ土坑 SK03、７はＡトレンチ土坑 SK07、８から28はＡトレンチ（出土遺構不明）、29から34はＣトレンチ土坑 SK04、35から42はＣトレンチ（出土遺構不明）出土である。トレンチ内の排水のために掘削された溝から出土したものが多く、遺構ごとに形態的特徴を読み取れるとは言い難い。

１は脚部と坏部の接合面できれいに破断しており、その様子から坏部と脚部を別々に作っていたことが容易にわかる。胎土は淡黄橙色を呈し、表面は摩耗して調整は不明瞭である。坏部は丸みを帯びた浅椀形で、２段階に分けて成形されている。まず円板状の素材粘土を脚部と接合し、その端部上面に口縁部分となる帯粘土を継いで立ち上げている。その接合線が坏部なかほどに段状に残る。２は坏部の大半が欠損している。孔内面はにぶい淡橙色、外面



第１図　千歳下遺跡出土土師器高坏（1）

は橙色を呈する。破断面から、脚部が坏部底面に食い込んでいることがわかる。３は５と接合する。内外面ともにぶい橙色を呈するが、坏部孔内面中央付近と脚部外側面には黒斑がみられる。脚部との接合面で坏部がはずれており、５の坏部底面中央には接合による圧力のため素材粘土が脚部孔内に半球状に押し出されていることが観察できる。脚部の上から坏部底

面となる粘土板を強く押しつけて食い込ませている。坏部は１と同様、２段階で成形されている。表面は摩耗しているが、坏部外面にわずかにハケ調整が残る。脚部孔の内面はヘラケズリで仕上げている。４は脚部のみが残る。脚部上端が坏部に食い込んでいた痕跡はなく、接合部の周囲を補強する貼り付け粘土も少ない。脚部の上面には上から強く押しつけた痕跡が認められる。胎土は橙色を呈する。脚部底面にはわずかにハケ調整がみられる。６は脚部のみが遺存する。接合部が欠損しているために坏部との接合方法は不明である。胎土はにぶい淡橙色で、脚裾部上面はハケ調整がなされ、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げている。

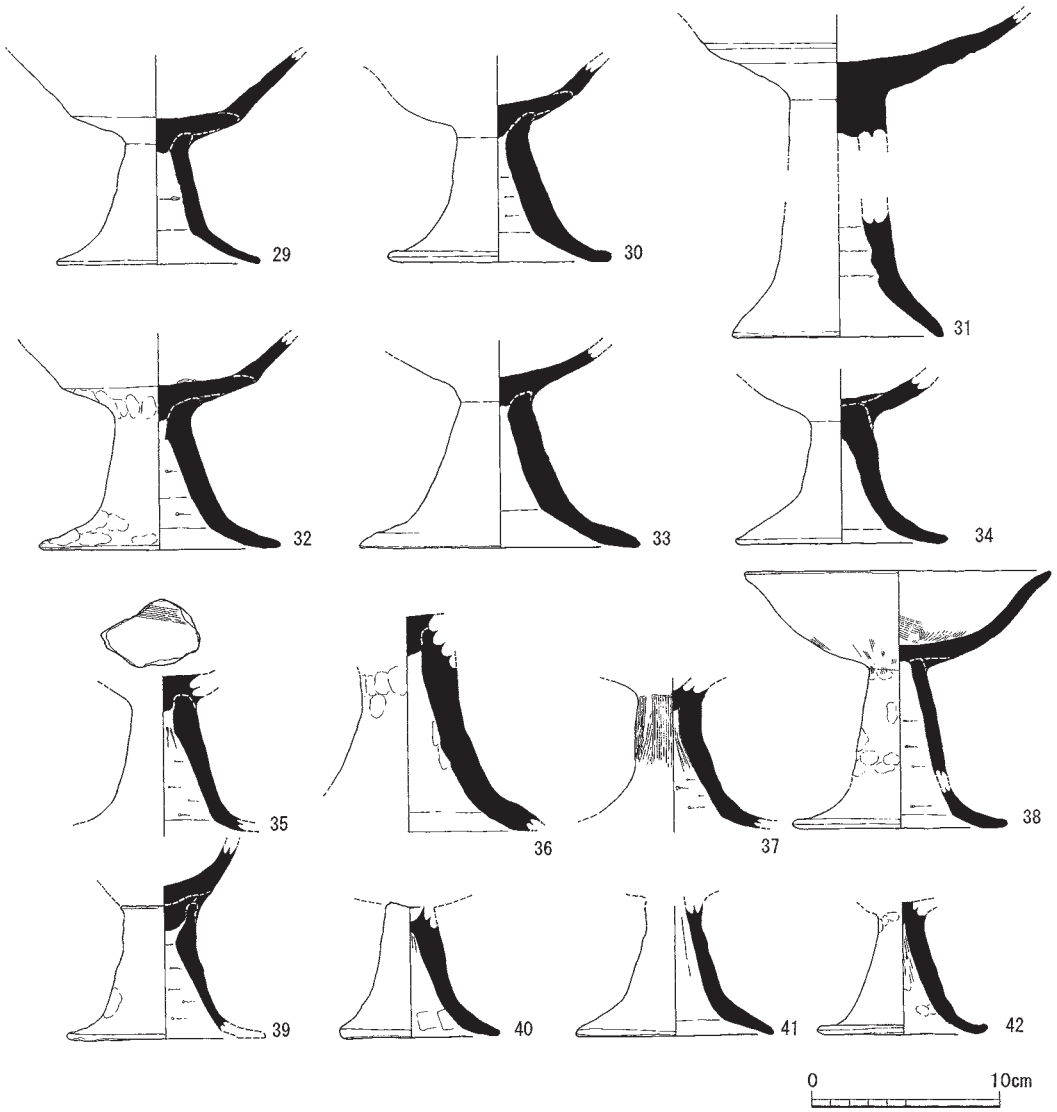
土坑 SK07からは７が１点出土した。脚部のみの遺存で、坏部との接合部が欠損しているため接合方法は観察できない。しかし、脚部が小型であることや接合部分を補強するための充填粘土の状況から、脚部は坏部の下面に貼り付けただけであったと想定できる。胎土は明赤褐色を呈し、脚裾部に黒斑がある。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

８は脚部のみで、坏部との接合部は欠損している。脚部上端には坏部との接合部分を補強する充填粘土は見られない。胎土は淡黄橙色で、脚部孔内面はヘラケズリがなされている。９は脚部が中央あたりで膨らみ、中空部分が広くなる形態をもつ。接合部は破損していないので断面からの観察はできないが、脚部孔内面には棒状の工具で坏部を下から押さえつけた痕跡がある。坏部底面の中央には半球状に押し出された凸部分が若干みられるが、脚部の形状と坏部の厚さなどから脚部上端が坏部底面に食い込んでいるとは考えにくい。坏部の上面中央がわずかに盛り上がっていることから、坏部の底部中央を上面から押して脚部へ押し込み、できた凹みに粘土を充填して坏の底部内面を成形したものと想定できる。胎土は灰白色で、焼成はあまい。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。10は脚部のみだが、脚部上端の孔には上から押し込まれた充填粘土の一部が残っている。外面は明赤褐色だが、孔内面は黒褐色を呈する。11と12は坏部との接合面で破断した脚部である。接合部、脚部上端が外側へ広がっているため、脚部に坏の底部となる円板状の粘土を充填して接合したと考えられる。11の外面は明赤褐色、孔内面は橙色で裾部に黒斑がある。12の胎土は灰白色で焼成があまく、かつ摩耗が激しいため調整は不明である。13は脚部上端で孔が貫通していない。別作りの脚部を坏の底面に貼り付けた後に接合部の周りを粘土紐で補強したのであろう。坏部は丸みを帯びた浅椀形で、１と同様、２段階で成形され、その接合線が段状に残っている。胎土は明赤褐色を呈し、脚部孔内面はヘラケズリ後の仕上げ調整がなされておらず、削りかすの粘土が付着したまま焼成されている。14は坏部に食い込んだ脚部と、脚部孔内の「半球状押し出し凸部分」の形状がよくわかる好例である。胎土はにぶい橙色を呈する。坏部に食い込んでいた部分は脚部の上端外側面に灰白色の焼成痕跡として残る。半球状押し出し凸部分があるものの、顕著な膨らみをもたない。脚部上端は外側へ広がる形状とはならず、三角コーンの先端を切ったような形をしている。15も13と同様に脚部孔が貫通しない。破断面の観察から脚部が坏部に食い込んだ様子はなく、脚部上端面に坏部を接着し、周囲を粘土で補強しているのみである。胎土は橙色を呈する。漆のように光沢のある黒褐色の皮膜が一部に残っている。断面でも観察できるため、土中成分が付着したものと考える。16は坏部が欠損

している。脚部上端は外側へ広がっており、接合部の外周を補強する粘土がわずかに残る。胎土は橙色を呈し､15と同じような暗黒褐色の皮膜が外面一部と孔内面全体に付着している。17の坏部は２段階に分けて作られる。すなわち、直角に近い角度で立ち上がった擬口縁をもつ浅皿状の底部を作り、擬口縁の内側に粘土を付け足して口縁部分を立ち上げて坏部を成形する。坏部の内外面とも丁寧にハケ調整が施されている。一方、脚部の造りはかなり粗く、孔内面には粘土紐の接合痕跡が未調整のまま残っている。坏部の中央を上から強く押さえた痕跡があるが、坏部と脚部は別々に作られており、円板状粘土を充填したとは考えられない。胎土はにぶい橙色を呈する。18は坏部の大半が欠損している。胎土は淡黄橙色で１～２㎜の長石粒を多く含み、焼成はあまい。摩耗が著しく、調整は不明である。脚部孔から観察すると坏部を脚部に押し込んだ様子はない。19も坏部の大半が欠損している。焼成は良好で、胎土は灰白色である｡器壁は薄く､脚部外面には焼成前に刻まれた３本の細刻線が上から下に走っている。坏部底面中央にはわずかながら半球状押し出し凸部分がみられるが、接合部の坏の厚さから脚部上端が坏部底面に食い込んでいるとは考えられない。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。20は坏部との接合面で破断し、脚部のみが遺存している。上端部は外側へ広がった形状を呈し、10・11・12などと同様の成形方法であると考えられる。脚筒部外面には、指頭圧痕が巡る。孔内面はヘラケズリの後にナデ調整で仕上げている。胎土は橙褐色を呈する。21は断面の摩耗が著しく脚部と坏部の接合部の観察が難しい。しかし、脚部が細身で、脚部上端の外側面が若干凹んでいるところが１・13などの接合部に類似していることから、脚部に坏部を接着して接合部分を粘土で補強する接合方法と考える。胎土は淡黄橙色を呈し、焼成はあまい。22･25･26はちょうど接合部の断面が見える状態で破損している。脚部上端は坏部底面に食い込むものの、円板状充填粘土は確認できない。22の胎土は外面が赤褐色で孔内面が灰褐色を呈する。接合部周辺にハケ調整がわずかに残っており、坏部上面には鉄銹が付着している。25はにぶい淡橙色で、坏部の底部上面はハケ調整、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げている。26の胎土は灰白色で焼成不良のため、外面の摩耗が激しく明瞭ではないが、接合部に縦方向のハケ調整がわずかに残る。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げる。23は坏部と裾部の大半を欠損するが、接合方法がよくわかるものである。坏部の底面中央の半球状押し出し凸部の膨らみが顕著で、坏部の底部上面の凹みからみても相当強く充填粘土を押し込んだことがわかる。脚部上端は接合部で外へ広がっている。胎土は橙褐色で焼成があまく、全体的に摩耗が著しい。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げている。24の坏部形態は17と類似している。浅皿状の坏部の擬口縁内側に粘土を付け足し、口縁部分を立ち上げている。接合部は脚部上端が坏部底面に食い込んでおり、その周囲を粘土で補強している。胎土はにぶい淡橙色を呈する。１㎜以下の細かい石英・長石粒などを多く含むため、表面はざらついている。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。27の脚部孔は上端で貫通してはいない。脚部の上端外側面に坏部が接合されていた痕跡があることから14同様に坏部底面に脚部上端を食い込ませて成形したことがわかる。胎土は橙色を呈し、表面の摩耗が著しく、調整は不明である。28は脚部のみ遺存している。脚部孔は貫通してはいない。接合痕跡

が脚部上端面にのみあることから、脚部上端は坏部底面に食い込んでおらず、接着部を粘土で補強するだけの接合方法であったのだろう。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。胎土は淡黄橙色を呈する。

土坑 SK04出土の29から34は比較的大型で器壁の厚いものが多い。29は脚部と坏部の接合面できれいに破断している。坏部は２段階で成形されていて、接合線が段状の形態として残る。坏部中央下面に半球状押し出し凸部分があり、円板状粘土を充填していることがわかる。胎土は淡白橙色で、脚部孔と坏部下面の一部に黒斑がある。脚部孔内面はヘラケズリがなされているものの、粘土紐の接合痕跡が残っている。30の坏部底面中央にも半球状押し出し凸部分があり、円板状粘土を充填しているといえる。坏部は29と同様２段階で成形されているが、接合線は丁寧なナデ調整により消されている。胎土はにぶい淡橙色で、外面のおよそ1/6に黒斑がみられる。坏部上面中央には鉄銹が付着している。31はかなり大型で器壁も厚い。



第２図　千歳下遺跡出土土師器高坏（2）

脚部孔には下からも粘土が充填されている。後述するが、この１点のみは高坏Ｉｂ類の中でもＩｂ’類として分離した。胎土は明灰褐色を呈する。大型で頑丈そうであるが、細かい破片に砕けて出土した。32は脚部と坏部の接合面で破断している。半球状押し出し凸部が顕著なことから、円板状粘土を充填していたことがわかる。坏部底面には鉄片と鉄銹が付着している。胎土はにぶい淡橙色である。外面の1/6と孔内面の一部に黒斑がみられる。33も32と同様の成形方法で、脚部と坏部の接合面で破断している。胎土は橙色で、脚部外面の一部に黒斑がみられる。脚部外面には、わずかだが鉄銹が付着している。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。34は土坑SK04出土の他の高坏に比べて小型で華奢な器形である。接合面で破断しており、その断面からは脚部上端を坏部に食い込ませ、接合部周辺を貼り付け粘土で補強している様子がよくわかる。脚部と坏部の接合部付近は明確な指頭圧痕はみられないが、脚部上端外側面が凹んでおり、接合時にこの部分を指で押圧したことがわかる。胎土は明赤褐色を呈する。脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

35は坏部の大半が欠損する。接合部の断面から坏部の底面に食い込ませた脚部上端の周辺を粘土で補強していることがわかる。胎土は淡橙色で、脚部孔内面はヘラケズリがなされている。坏部の底部上面はハケ調整がなされている。36も坏部の大半が欠損する。胎土は橙色を呈する。大型で器壁も厚い。脚部孔内面には粘土紐の接合痕跡が残り、孔内面の調整が重視されてはいなかったことがわかる。坏部底面中央には半球状押し出し凸部が顕著に残り、円板状粘土を充填したと考えられる。37も坏部の大半が欠損する。胎土はにぶい淡橙色で、脚部外面の上半は縦方向にハケ調整が施されている。脚部孔内面はヘラケズリがなされている。削りかすが付着したまま焼成されているため、孔からの観察が困難であり、坏部底面中央の半球状押し出し凸部の有無は不明である。脚部上端面に残った粘土は中央が凹んでおり、円板状粘土を充填した可能性もある。細身の脚部や脚部上端面が若干凹んでいる様子が１・13などの接合部によく似ていることから、脚部と坏部が別作りで、脚部を坏部底面に食い込ませずに周囲を粘土で固定する接合方法であると考えられる。38の脚部は細身で、坏部は口縁が外弯するなめらかな浅椀形をなしている。坏部は内外面ともハケ調整がなされている。脚部は坏部底面に食い込まず、半球状押し出し凸部もない。接合部は貼り付け粘土で補強されている。胎土はにぶい淡赤褐色を呈する。39は小さな坏部をもつ特異な形態の高坏である。坏部が脚部との接合面ではずれており、坏部の破断面からは円板状の充填粘土が観察できる。脚部に円板状充填粘土を押し込んで接合した後に、その周囲に坏部の側面を成形し、上面に粘土を重ねて坏部の底部を成形している。脚部上端は接合部で外側に広がっている。胎土は明赤褐色で、１～３㎜、ときには10㎜ほどの石英・長石粒が混和される。小さな坏部外面はハケ調整がなされている。40は脚部のみが遺存する。坏部との接合部は脚部上端面が強く押さえられて凹んでおり、その周りに補強粘土が残っている。脚部孔が貫通せず、接合部外面の補強粘土が厚い。胎土はにぶい淡橙色を呈し、脚部孔内面は弱いヘラケズリで仕上げられている。41の胎土もにぶい淡橙色で、焼成はあまく、全体的に摩耗が著しい。接合部は欠損しているために観察はできないが、脚部上端が広がっておらず細身

であることから、円板状粘土を充填する接合方法ではないと考えられる。42も坏部の大半を欠損する。断面から脚部上端が坏部の厚さの半分あたりまで食い込んでおり、その周辺を貼り付け粘土で補強している様子がわかる。胎土は橙色で、脚部孔内面はヘラケズリで仕上げられている。

接合方法の分類　以上、高坏の脚部と坏部の接合部分の観察から、以下の３種類の接合方法に分類できる。坏部底面中央に半球状押し出し凸部のあるものを高坏Ⅰ類とする。このⅠ類の中でも、さらにⅠａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類と細分することが可能である。千歳下遺跡で出土したⅠ類はほぼすべてⅠｂ類として分類したい。なお、Ⅰａ・Ⅰｃ類については他遺跡との比較の項で後述することにし、ここではⅠｂ類の接合方法について述べておきたい。

まず、Ⅰｂ類は筒状の脚部に円板状の粘土を上から強く押しつけて接合し、それを基礎として周りに坏部を成形していく。この接合方法をとるものは、筒状の脚部の内部に坏部が食い込んでできる半球状の押し出し凸部が残る特徴がある。また、筒状の脚部の上端は上から押し当てられる粘土の圧力によって広がってしまうものが多いといえる。さらには上からの円板状充填粘土を受け入れ易くするために、この形をとるようになるとも考えられる。Ⅰｂ類は比較的脚部径が大きく、脚部・坏部ともがっしりした頑丈な器形のものが多い。また、円板状粘土によって坏部が支えられるため、脚部の上端には接合部を補強するための貼り付け粘土がほとんど見られない。23や39はⅠｂ類の典型的な例である。31は脚部孔に下からも粘土を充填しており、Ⅰｂ類の中でもⅠｂ'類として分離したい。

高坏Ⅱ類は脚部と坏部を別々に作った後、脚部を坏部に押しつけてある程度食い込ませ、周囲に粘土を充填して接合するものである。典型的な例として14があげられる。坏部が押しつけられてできる押し出し凸部は若干あるものの、Ⅰ類ほど顕著な膨らみをもたない。脚部上端はⅠ類のように外側へ広がらず素直に直立するものが多い。

高坏Ⅲ類は脚部と坏部を別々に作ったのち、脚部に坏部を接着し、周囲を粘土で補強することによって接合するものである。38が典型的な例である。脚部上端は坏部底面に食い込まず、押し出し凸部はみられない。脚部は比較的細く華奢で、坏部も器壁が薄い浅椀形のものが多い。脚部孔は貫通しないものが多い。以上から出土例を分類すれば、次のようになる（第３図）。

Ⅰｂ類　：３・４・５・８・10・11・12・16・20・23・29・30・(31)・32・33・36・39

Ⅱ類　：14・17・22・24・25・26・27・34・35・42

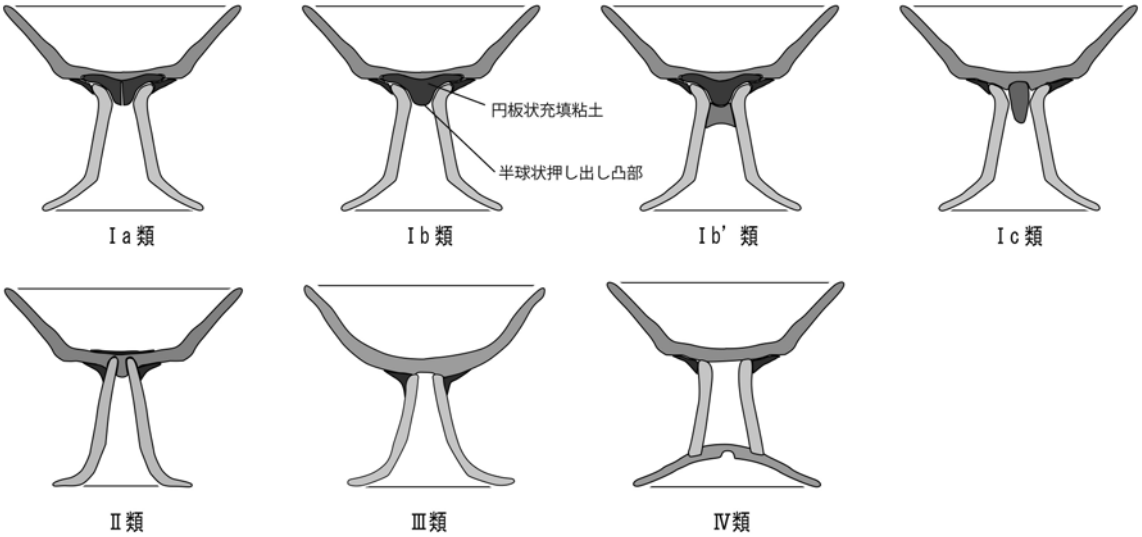
Ⅲ類　：１・(７)・13・15・18・19・21・28・38

ⅠあるいはⅡ類：２

ⅡあるいはⅢ類：９・37・40・41

不明　：６

他遺跡との比較　当遺跡から湾を挟んで対岸の丹後半島、丹後一宮神社（元伊勢籠神社）に隣接して難波野条里遺跡がある。地理的にも時期的にも当遺跡と関連するとみられる祭祀遺



第３図　高坏接合部模式図

跡である（石尾・引原 2008）。難波野条里遺跡祭祀遺構 SX200の高坏29点を観察したところ、難波野条里遺跡には千歳下遺跡出土の高坏とは明らかに異なる成形方法のものがある。千歳下遺跡では、脚部上端に円板状の粘土を強く押しつけた際にできる半球状押し出し凸部があったが、難波野条里遺跡出土例ではそれをわざわざ指で成形して貼り付けているものが多く見られた。上からの強い圧力によって自然にできる半球状押し出し凸部はきれいな膨らみをもつが、難波野条里遺跡のものは指で成形しているため、歪んだものや中心がずれているもののほかに、不自然に突き出たものさえある。円板状粘土を充填するⅠｂ類の半球状押し出し凸部を真似ようとしているものと考えられる。この接合方法をⅠｃ類として分類する。難波野条里遺跡例では接合強度とは関係なく単なる「ほぞ穴（脚部孔）」に差し込む突起状の「ほぞ」となっていることから考えると、型式学的にみて難波野条里遺跡出土例は千歳下遺跡出土のそれよりも後出する痕跡的要素をもつと認識できる。

また難波野条里遺跡出土の高坏の中には、１点のみではあるが、坏部・脚柱部・脚裾部を別々に作っているものがあった。これを高坏Ⅳ類とした。脚裾部には底面中央に脚部孔の名残りといえるような痕跡的な凹みが作られている。このⅣ類の例からしても、難波野条里遺跡出土例が千歳下遺跡出土のそれよりも後出するものと判断できる。

以上の観点から難波野条里遺跡の高坏を分類すると次のようになろう。

Ⅰｂ類：４点
Ⅰｃ類：９点
Ⅱ類：３点
Ⅲ類：７点
Ⅳ類：１点
ⅠあるいはⅡ類：１点
ⅠあるいはⅢ類：２点

不明：２点

また、丹後東部の集落遺跡、浅後谷南遺跡の概要報告では、高坏を古墳時代前期後半から古墳時代中期後半まで３段階に編年している（石崎・黒坪・福島 2000)。まず、古墳時代前期後半とされる溝 SD2012の高坏は、ミガキ調整が丁寧に施されており、底面も丁寧なハケ調整がなされているものがある。半球状押し出し凸部に、棒状工具による刺突痕のある資料も数点確認した。坏部と脚部を接合する際、下から棒状工具で押さえつけたものと考えられる。接合方法としてはⅠ類にあたり、Ⅰｂ類よりも早い時期にみられることから、刺突痕のあるものをⅠａ類とする。

他に坏部底面に脚部をねじこんだ痕跡があるものや、脚部に円形の透かしが開いているものもあり、特定の接合方法のみが採用されていたわけではないようである。だが、調整や接合の丁寧さから、溝 SD2012の高坏は千歳下遺跡出土例よりも先行するといってよいであろう。古墳時代中期前半とされる溝 SD2010古相の高坏では、ミガキ調整がいまだ坏部内面には残るものの、外面には施されなくなり、脚部の裾部底面のハケ調整も溝 SD2012のものに比べて雑になっている。そして、古墳時代中期後半とされている溝 SD2010新相の高坏は、内外面ともミガキ調整がなされなくなる。

浅後谷南遺跡では接合方法もⅠ類からⅢ類までさまざまで、１点ではあるが難波野条里遺跡出土例にみられるⅠｃ類がある。調整や坏部と脚部の接合方法などの成形手法から、千歳下遺跡は浅後谷南遺跡の溝 SD2010古相から一部新相の時期にあたるものである。

以上のことから、千歳下遺跡出土高杯の多くは浅後谷南遺跡溝 SD2010古相（古墳時代中期前半）前後から難波野条里遺跡祭祀遺構 SX200よりも前の段階にあたるものと考えることができる。

高坏接合部の型式変化　千歳下遺跡・浅後谷南遺跡・難波野条里遺跡の高坏から、調整と接合方法に着目して型式的変化を読み取ろうとすると次のようになる。なお、特徴的な部分を書き出したもので、各段階のものがかならずしもこれらの要素すべてを持ち合わせているものではない。

第１段階：丁寧なミガキ調整がある・裾部に丁寧なハケ調整がある・坏部と脚部の接合方法にはⅠａ類が多い。

第２段階：外面のミガキ調整がなくなる・全体的に調整が雑になる・坏部と脚部の接合方法にⅠｂ類が主体部となる。

第３段階：坏部と脚部の接合方法にⅠｃ類やⅣ類が出現する。

難波野条里遺跡に１点のみみられるⅣ類の出現は、Ⅰｃ類の出現と同様に成形方法にこだわらず、形だけを真似ようとした形骸化した段階を感じさせる。

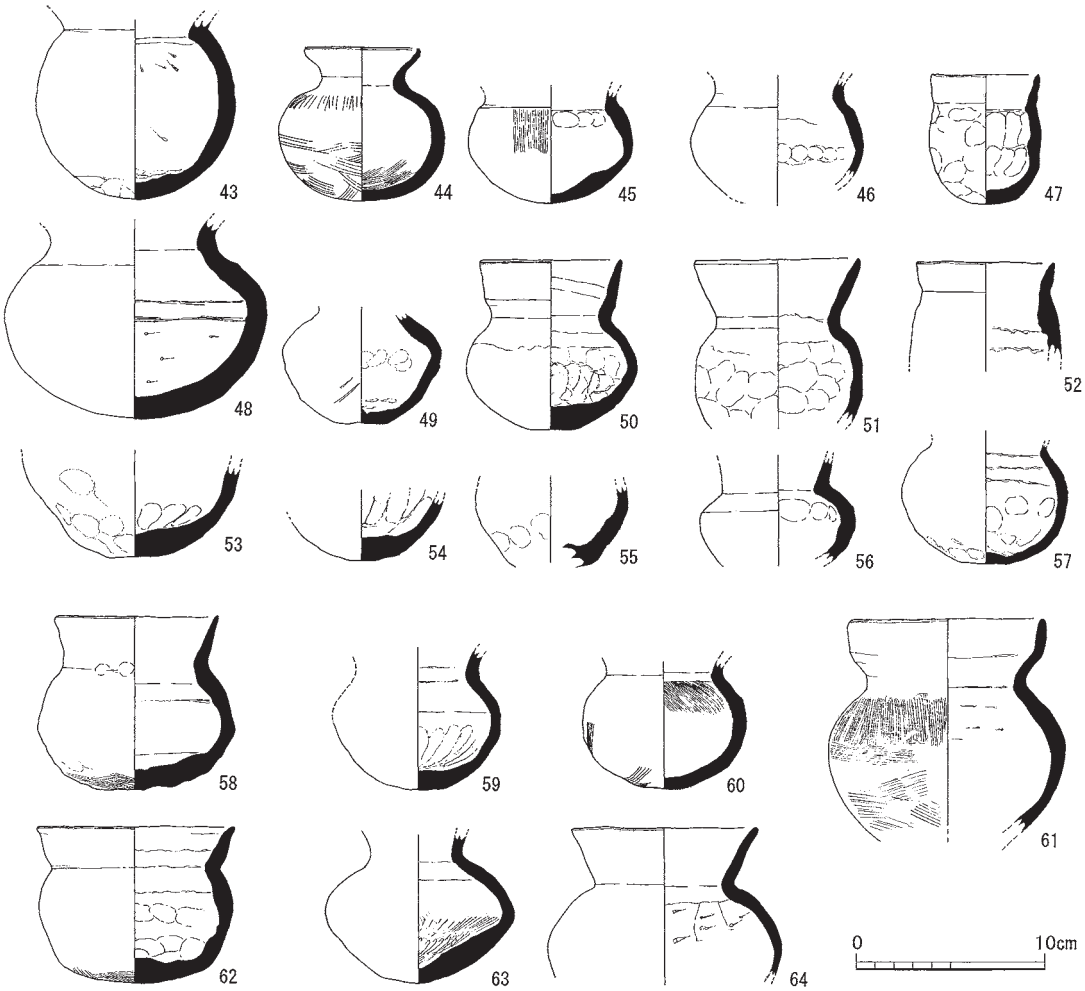
しかし、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類はそれぞれ各段階に存在しており、この分類によって年代を速断することはできなかった。ただし、Ⅰ類の中では時期差を読み取ることができる。すなわち、早い時期にⅠａ類が採用されるが、高坏が大型化してくるとⅠｂ類が主体となり、次に半球状押し出し凸部を故意に指で成形して接合ほぞとするⅠｃ類が出現してくる。Ⅱ・Ⅲ類

では、今回指摘したⅠ類のような型式差は読み取れなかったが、さらなる観察・研究によって時期的変容を考慮した分類ができる可能性がある。

丸底壺（第４図43 ～ 64）　丸底壺22点を図化した。43 ～ 45はＡトレンチ土坑 SK03出土、46～55はＣトレンチ土坑 SK04出土であるが、その他は排水溝などの掘削によって出土したため、所属遺構は不明である。なお、56 ～ 61はＡトレンチ、62 ～ 64はＣトレンチから出土した。

43は1/2程度しか遺存しない。口縁部を欠損するもので球形に近い胴部をもつ。外面は下半に小範囲の不整方向のヘラケズリののち、ハケ調整を行なう。内面は上半がヘラケズリ、下半は指頭によるナデ上げ､底面に指頭圧痕が顕著となる。胎土は淡黄褐色で焼成があまく、磨耗が著しい。44は口縁端部をわずかに欠くものの、ほぼ完形に近い。頸部から緩やかに外反して端部でわずかに内弯する特異な形態をもつ｡外面は下半に小範囲のヘラケズリののち、全体にハケ調整を行なう。外面下半には漆かと思われるような暗褐色有機質の皮膜が遺存している。高坏15などに付着していたものと類似する。胎土は淡黄褐色で内面はハケ調整、底部に指頭圧痕を残す。45は口縁部が欠損する。玉葱形に近い扁球形の胴部をもつ。胴部上半と底部を接合して成形したようである。明るい褐色系の胎土で､外面は細かいタテハケ調整、肩部内面に口縁部との接着のためにつけられた指頭圧痕が認められる。

46は1/3程度しか遺存しない。口縁部および底部を欠損する。45同様に底部を胴部上半と接合して成形しているようである。焼成はあまく、灰白色を呈する。磨耗が著しく、調整不明瞭だが、内面中位に接合のための指頭圧痕がみられる。47は口縁部を一部欠損する。胴長の特異な形態となる。手捏ねによって成形された胴部に口縁部が接合される。焼成はあまく、肌白色を呈する。口縁外面から肩部にかけて共伴鉄器の銹と考えられる酸化鉄が付着している。昨年度紹介した鉄製品（野島・加藤・脇山・荒平 2008）に接着していた可能性が高い。48は大型品といってもよい。口縁部を欠損する。肩部が張る完形の胴部をもつ。肩部内面には指頭圧痕があり、接合によって生じた余分な器壁の厚さを減じるために横方向のヘラケズリによってかき取られている。胎土は桃褐色を呈する。外表面には２次的な被熱の痕跡がみられる。49も口縁部が欠損する。手捏ねによる胴部と肩部から口縁部が接合されるようである。肌褐色を呈する。50は1/2ほどしか遺存しない。頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁をもつ。外面は灰白色だが、下半全体を黒斑が覆う。43同様に底部外面が多面体になるような粗いヘラケズリを行ない、ハケ調整で仕上げるようである。内面上半に粘土紐の接合痕、下半から底部にかけて指頭によるナデ上げが放射状にみられる。51は外面肌色となる焼成のあまいものである。下半から底部が欠損するものの、やや胴長となることがわかる。胴部の上半と下半を接合し、口縁部となる帯粘土を巻き上げるもので、内面全体に指頭圧痕が著しい。52は1/2が遺存する。これも焼成があまく、灰白色となる。表面が剥落しているようである。粘土紐を巻き上げて口縁部まで成形している。手捏ねによるため、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。53は底部のみが遺存する。手捏ねで指頭圧痕も顕著である。橙褐色を呈する。やや歪んでいるため、器種が明瞭ではないが、丸底壺の類としておきたい。54も底部のみ遺存する。灰白色を呈し、不整方向のヘラケズリののち、ハケ調整で仕上げる。内



第４図　千歳下遺跡出土土師器丸底壺

面は指頭による強いナデ上げを行なう丁寧な造りの丸底壺である。55も底部の一部のみが遺存する。焼成前の穿孔がある。灰白色で外面は指頭圧痕、内面は横位のユビナデがみられる。小片のため、全体の器形は不明である。

56は口縁端部と底部を欠損する。扁球形の小型の胴部から強く外反して真直に立ち上がる口縁部をもつ。47同様、胴部下半に鉄銹が付着する。外面は磨耗しているものの、底部と胴部上半を接合して口縁部となる帯粘土を巻き上げていることがわかる。灰白色で内面には粘土の接合部分に指頭圧痕が観察されるが、比較的丁寧な造りであるといえよう。57は口縁部が欠損し、全体の1/2しか遺存しない。扁球状に近い胴部をもつ。灰褐色で器壁の薄いものである。内面下半には指頭圧痕やユビナデが著しく、内面肩部から口縁部分に粘土紐の接合痕が顕著にみられる。58はほぼ完形に近い。厚手で底部が平坦になる特徴的な器形をもつものである。灰黄褐色で、底部外面に不鮮明な粗いハケ状の工具による調整の痕跡がある。59は1/2程度で、口縁部が欠損する。球形に近い胴部をもつ。57とほぼ同様な造りで、頸部内面に粘土紐接合痕跡がある。60も口縁部が欠損する。やや扁球形に近い胴部をもつ。薄い橙褐色から肌色を呈し、内外面は横位のごく細かい目のハケ調整で仕上げる。61は底部が欠損

する大型品である。内側に屈曲して垂直に立ち上がる口縁をもち、二重口縁の名残りを見せている。灰白色を呈し、外面は下半が不整方向の粗いハケ調整、肩部を細かい目のハケ調整で仕上げる。内面は甕などと同様に横位のヘラケズリが施される。62は1/2ほどが遺存している。胴部最大径が下がる玉葱形の胴部と、器壁を減じながらも斜め外側に立ち上がる口縁部をもつ。肌白色で底部に粗いハケ調整を残している。58と造りが類似しており、内面に指頭圧痕と粗いユビナデが窺える。63も口縁部は欠損し、1/2程度しか遺存しない。胴部中央が極端に張る算盤玉に近い形態をもつ。外面は淡黄褐色から肌色で、丁寧なハケ調整仕上げの痕跡がみられる。内面は放射状の当て具痕跡がみられる。熟練した調整技術を窺うことができる。他の共伴資料とは異なる技術で製作された搬入品とみたい。最後に64であるが、1/2程度が遺存する。直口壺としたほうがよいかもしれない。これも61と同様に外面ハケ調整で、薄壁化するために丁寧なヘラケズリを行なうものである。他とは異なり、暗褐色を呈する。一連の小型丸底壺の製作技術とは異なるものといってよい。

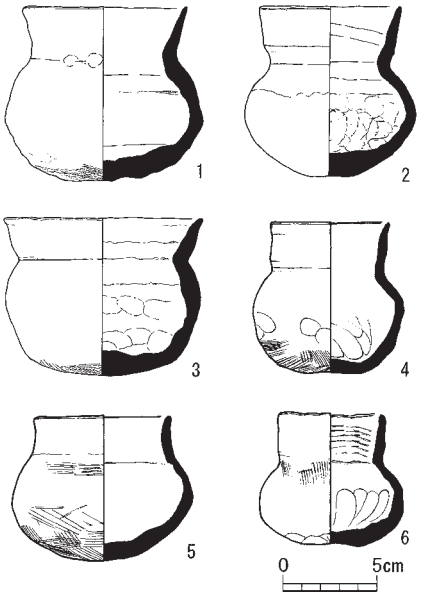
丸底壺はおよそ製作技法が統一されてはおらず、千差万別といった感がある。扁球形や玉葱形に近いものから、球形になるもの、あるいは縦に長い長胴形になるものまで様々といってよい。また成形についても幾種類かの方法がみられた。半球形となる底部の上に胴部上半の粘土帯を接合して、さらに口縁部の粘土帯を巻き上げていく成形方法が一般的である。しかし、その中でも外面をハケ調整で仕上げ、内面はヘラケズリかハケ調整とし、接合の痕跡をほとんど残さない丁寧な造りのもの（43・44・60・61・63・64）と、内面の接合痕跡が比較的明瞭に観察でき、指頭圧痕やユビナデ・ナデ上げが顕著にみられるもの（45・46・49・50・51・56・57・58・59・62）に分類することができる。また、小さなものは粘土紐の巻き上げと手捏ねによってのみ成形するものもある（47・52）。手捏ねによる成形のものは焼成があまく、灰白から灰肌色になる。

以上から、最も丁寧な接合による成形、ヘラケズリやハケ調整による仕上げを行なうものを丸底壺Ⅰ類、丁寧な成形を行なうが、粘土接合痕跡や指頭圧痕がみられるものを丸底壺Ⅱ類、小型で専ら手捏ねによって成形されるものを丸底壺Ⅲ類としたい。千歳下遺跡ではⅠ類からⅢ類まで認められるわけであり、定型化していた小型丸底壺の形態的な統一感はないものの、それが時期的に新しいものとしてのみ捉えるよりも、祭祀遺跡における特殊な丸底壺製作事情がそこに関与しているといえる。

他遺跡との比較　先述した高坏と同様に、丸底壺についても難波野条里遺跡祭祀遺構SX200出土のものとの比較を行なってみたい。まず、丸底壺が出土した難波野条里遺跡祭祀遺構SX200では、小型丸底壺だけではなく、大型化した丸底壺が出現している点で異なる。また、難波野条里遺跡出土例では、千歳下遺跡でⅢ類とした、手捏ね成形によるものは存在しなかった。難波野条里遺跡のものの方が内面ナデ上げによる調整が丁寧であるが、胴部最大径に対する頸部径の比率が50～60％台の丸底壺が定型化した主体（石尾・引原 2008、69頁、第11図20・21・23～25）となることから、相対的に新しい様相をもつものと思われる。千歳下遺跡丸底壺58・62（第５図１・３）は難波野条里遺跡に類例（石尾・引原 2008、69頁、第

11図28・30〈第５図５〉）があり、同一の成形技法であることが確認できた。また、千歳下遺跡丸底壺50（第５図２）は難波野条里遺跡類例（石尾・引原 2008、69頁、第11図26・27〈第５図４・６〉）に先行する形態と考えることができ、時期幅があるものの、千歳下遺跡出土例がやや古い様相を示していることがわかる。

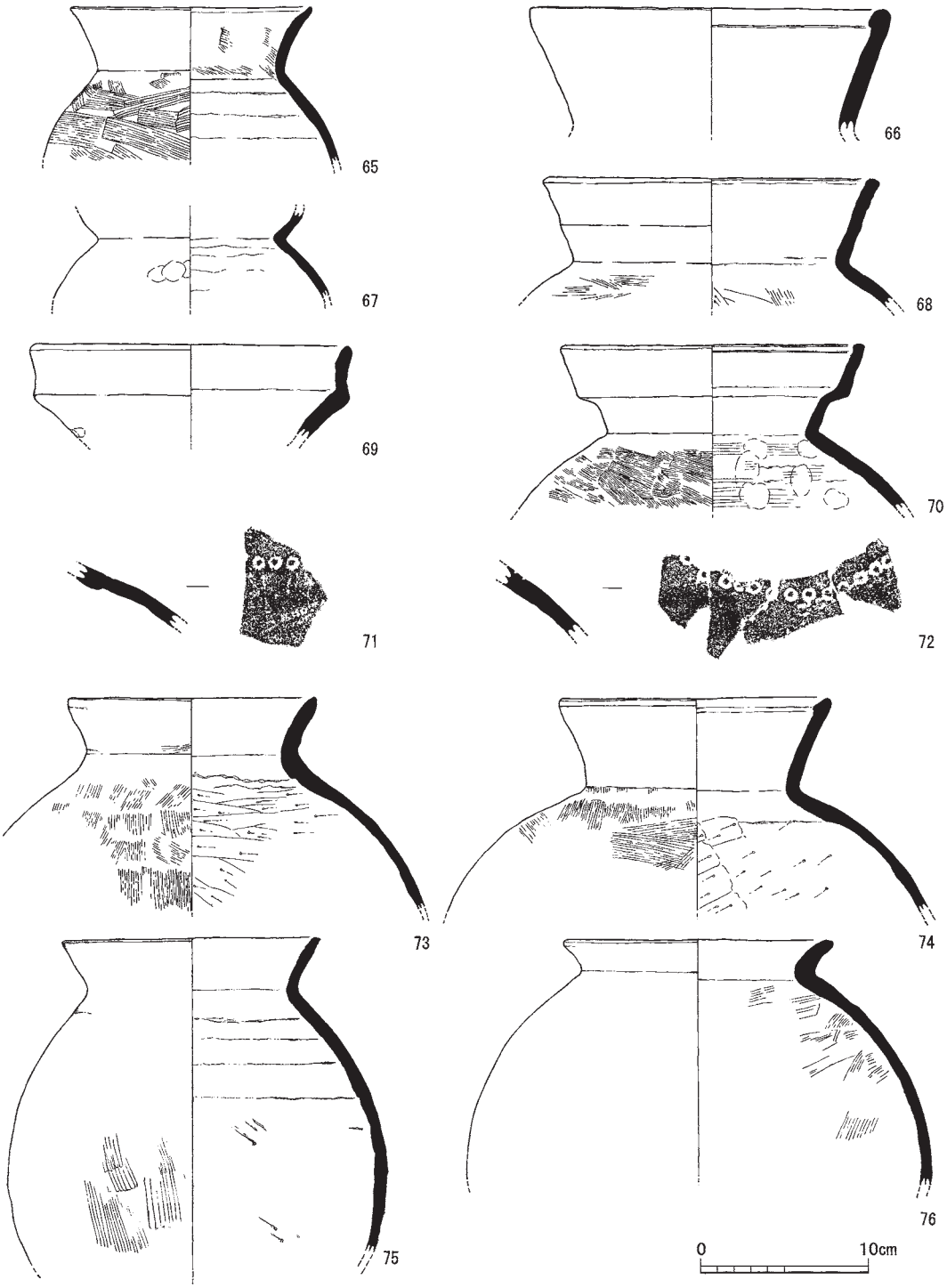
壺・甕類（第６図65 ～ 76）　全体を復原できるものは少ない。多くは破砕しており、甕75のみ胴部下半付近までその形状を知りえることができた。65･66と68から71はＣトレンチ土坑 SK04出土、72はＡトレンチ土坑 SK04出土のもので、そのほか67はＡトレンチ、73から76はＣトレンチ（出土遺構不明）出土である。



第５図　千歳下遺跡出土丸底壺(1～3)と難波野条里遺跡出土丸底壺(4～6)

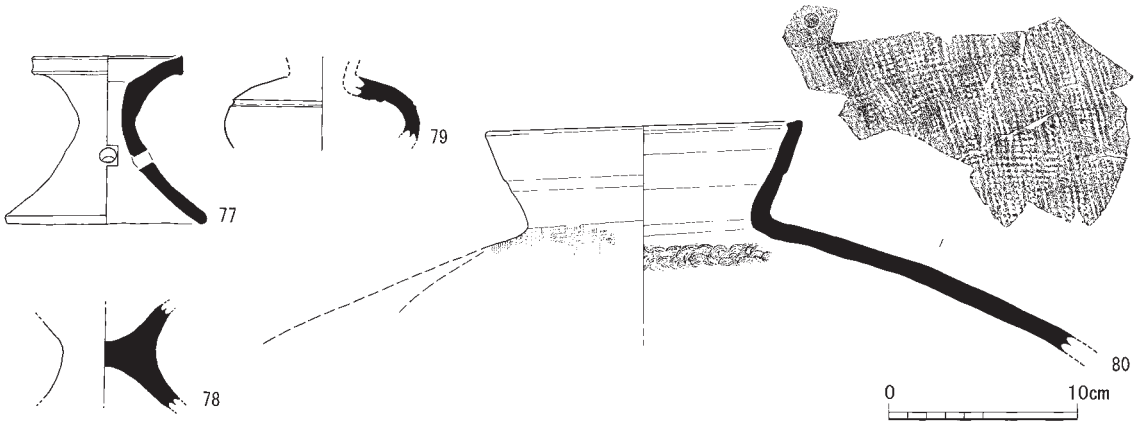
65は口縁部1/4しか遺存しない。口縁部はやや外弯しつつ薄くなり、端部でわずかに内反する。淡桃褐色の特徴的な胎土を持ち、外面に横位のハケ調整、内面に幅1.5㎝程度の粘土帯の接合痕を残している。66は全周する壺口縁部である。口縁端部は内側に肥厚し、隆帯状になる。胎土は暗灰褐色で器壁が厚く、内外面横位のハケ調整を行なう。67は頸部1/4のみが遺存する。65同様に内面に1.0㎝程度の粘土帯の接合痕が明瞭に観察できる。口縁端部を欠損するものの、やや内弯していくようである。淡褐色を呈し、外面に鉄銹の付着がみられる。68は口縁部1/8程度の小片である。外反した口縁はやや波打ち、端部は肥厚しない。外面は赤褐色で､丹塗りの可能性がある。69も在地的な二重口縁壺で､口縁1/5程度が遺存する。器壁が厚いものとなる。灰褐色から灰白色を呈する。70は山陰系の二重口縁壺で、口縁部1/8程度が遺存している。擬口縁に外傾する口縁部を載せる。端部を肥厚させるものの、口縁部の立ち上がりはやや短くなり、端部内面に一条の沈線が入る。明橙褐色を呈し、外面が細かなハケ調整、内面がヘラケズリののち、横位のやや粗いハケ調整によって平滑に仕上げる。71・72は二重口縁壺の肩部竹管文である。同一個体のものと思われるが、接合しなかった。ともに赤褐色を呈する。内面には65・67と同様な粘土帯の接合痕跡がみられる。器壁の厚さと傾きから70よりも大型のものと想定されよう。

73は頸部から緩やかに外弯する口縁をもつ直口壺である。全体の1/6程度が遺存する。頸部内面に口縁部粘土帯の接合痕跡が明瞭にみられる。肌色に近い淡明褐色で、外面は全体にハケ調整、内面は横位の粗いヘラケズリによって器壁を減じている。74は全体の1/8程度が遺存する。直口の口縁端部はわずかに内側に肥厚する。薄い灰褐色で、外面ハケ調整、内面ヘラケズリの仕上げ方が73と同様のものであるが、より丁寧である。布留式中相を示しているといってよい。75も1/6程度が遺存するに過ぎない。口縁部中位がやや厚くなり、端面が上を向く特徴をもつ壺である。焼成不良で灰白色を呈する。やや歪んでいるため､実際はもっ



第６図　千歳下遺跡出土土師器壺・甕

と胴部が膨らむ形態となるかもしれない。内面上半に65・67などと同様な粘土帯の接合痕跡がみられる。76も全体の1/6以下、わずかな破片しか遺存してはいない。短い口縁部が強く外反する。肌色に近い淡灰褐色を呈し、内面は頸部直下までヘラケズリを施し、細目のハケ調整を行なう。粘土帯の接合がみられない点では74と類似するものの、口縁部の形態からみても新しい。



第７図　千歳下遺跡出土土師器器台および須恵器瑳・横瓶

口縁部の形態に注目すると、65のように口縁端部に向かって薄く、わずかに内弯気味に立ち上がる、布留式でも古い様相を持つものがある。また、端部を内側に肥厚させる布留式土器（布留３式前後〈寺沢 1986〉）の特徴を示すもの（66・70・74）もあり、小型丸底壺や高坏などからすれば、甕・壺形土器はやや古い様相をもつものが散見できるといった印象をもつ。とくに土坑SK04は比較的古い様相をもつ布留式土器破片も含まれていることがわかる。しかし一方、73や75・76など明らかに新しい型式の土器も含まれており、祭祀遺跡がある程度の期間存続していたことを想定せざるをえない。

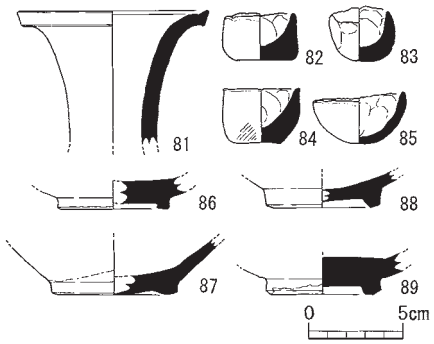
器　台（第７図77・78）　77は発掘区域の南側に隣接した宅地の下水管埋設工事に伴う立会い調査によって発見された。脚部の一部を欠損するが、完形に近い。器高が裾径よりも小さい形態となる。口縁端面は垂直となり、脚裾部の広がりはやや萎縮している。受部は平滑で丁寧なヘラミガキが施されている。明橙褐色の精良な胎土が使われている。穿孔数は推定４つ。これも布留式でも古い様相を示すものといってよい。78はＣトレンチ西壁から出土した。橙褐色で上下端が欠損し、全体の形状は不明である。

手捏ね土器（第８図82 ～ 85）　82・83・85はＡトレンチ排水溝掘削時に出土した。84は土坑SK03上層の落ち込み部分から出土した。

いずれも粘土塊から手捏ねで成形したものである。内面に親指を押し込んで成形した痕跡が残る。82は平坦な底部から垂直に立ち上がるものの、内面は指ナデの圧痕によって椀形となる。橙褐色の胎土を呈し、指頭の痕跡が顕著にみられる。83は手捏ねのため口縁部分が水平に整えられてはおらず､歪んでいる。褐色を呈する。84も手捏ねで外形がやや歪んでいる。胎土は暗褐色で、82同様、内面の指痕が顕著となる。85は器壁を薄く作るもので、他とは異なる。外面はナデ消しているが、粘土紐の継目が残る。灰白色を呈する。

須恵器（第７図79・80・81）

出土遺物を再度確認し、瑳など須恵器細片が見つかった。79は瑳肩部破片である。土坑SK04の検出前後に出土したため、SK04に伴うものかどうかは不明である。肩付近は水平に近く、器表も平滑で丁寧に仕上げられている。80はＡトレンチ断割り、およびその付近で出土



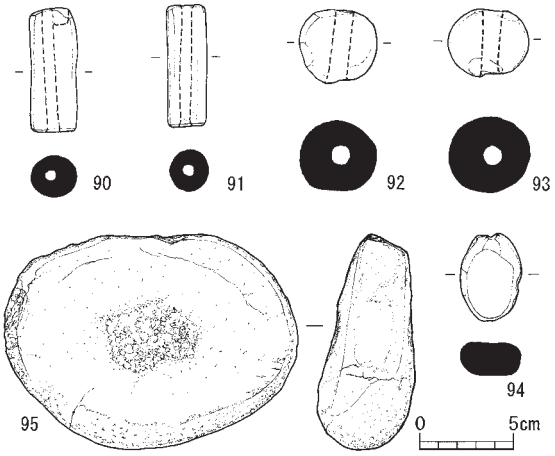
第８図　千歳下遺跡出土磁器類他

した横瓶である。破砕されたものとみられ、数センチ程度の破片が大量に出土している。細片のためすべてを接合することができなかったが、胴部長径が80cm近くになるかと思われる。内面は同心円叩き、外面は格子目叩きの後に回転カキ目調整で仕上げる。このほか、Ａトレンチ鎌倉時代以後の遺構面付近から出土した須恵器壷Ｌ（第８図81）がある。口縁部で大きく外反し、端部を上下に拡張する。平安時代前期のものであろう。

磁　器（86 ～ 89）

86から89はＣトレンチ、鎌倉時代以後の遺構面で出土した。86･87は溝 SD02、88は西壁の断割りの際に出土した。89は溝 SD03から出土した。

86･89は龍泉窯の青磁椀である。いずれも高台と見込み部がわずかに遺存するものである。釉薬は高台内側及び高台畳付け部分以外の全面に施している。86は外面に蓮弁状の痕跡を有する。高台は低く、断面四角形を呈する。高台内側のケズリは浅い。釉薬は明オリーブ灰色（2.5GY7/1）である[(2)]。龍泉窯系青磁椀Ｉ－５類（森田 1995）と考えられる。89も高台内側のケズリが浅いため底部が厚く高台高は低い。高台はやや開く断面四角形を呈する。畳付け外側を削り、内面の見込みには浅い圏線が入る。釉薬はオリーブ灰色（2.5GY6/1）である。外面に蓮弁が確認できないため、龍泉窯系青磁椀Ｉ－１類と考えられる。87・88は白磁椀である。87は直線的に延びる体部と低い高台を持つ。高台内側のケズリは浅く、底部は厚い。内面の見込みは強く押さえて段をつける。胎土は粗く黒色鉱物細粒を含む。釉薬は灰白色（5Y8/1）を呈し、高台付近まで垂れる。白磁椀Ⅳ－１類と考えられる。88は断面四角形のやや細い高台を持ち、高台部から体部は直線的に外上方に延びる。内面に灰白色（7.5Y7/1）の釉薬が施されるが、外面には認められない。白磁椀Ⅵ類と考えられる。86は14世紀、87から89は12世紀後半から13世紀前半の年代観を持つものと考えられる。



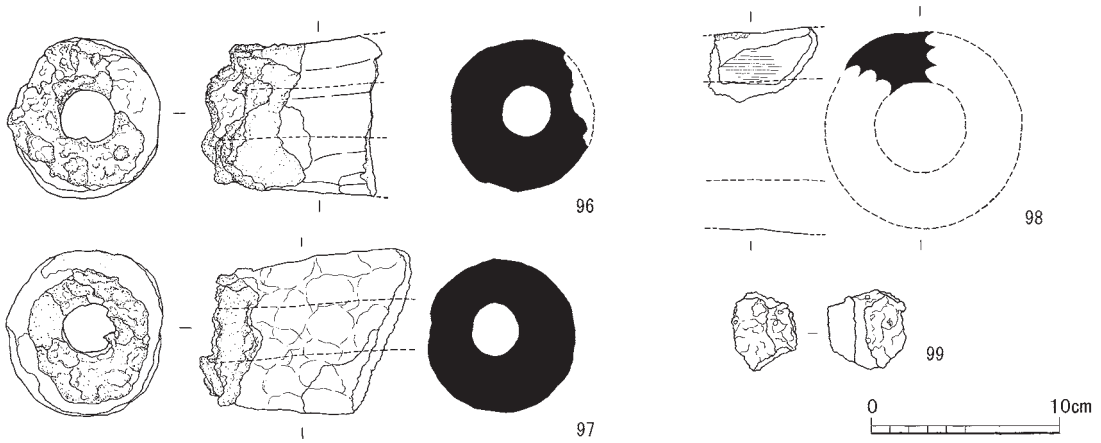
第９図　千歳下遺跡出土土製品・石製品

３．千歳下遺跡出土土製品・石製品の概要

土錘・石錘他（90 ～ 95）

90・92・93はＣトレンチ土坑 SK04から出土、91はＡトレンチ排水溝、94はＡトレンチ SK11出土である。

90は全長6.4cm、重量45.4g となる。灰白色である。上端に２孔があり、直径5.5mmの中心孔は貫通しているが、もう



第10図　千歳下遺跡出土羽口

ひとつは深さ８㎜で中心孔に通じる。91はやや細身で全長6.2㎝、重量38.3g となり、直径４㎜の中心孔が貫通する。橙褐色である。92・93ともに球形の土錘である。92は直径3.6 ～ 4.2㎝、重量57.1g となる。全体に磨耗しており、砂粒を多く含む粗い桃灰白色の胎土が使われていることがわかる。93は4.0～4.2㎝、重量59.1g となる。精良な灰色粘土を用いており、黒斑が残る。紐の当たる部位を幅３㎜、棒状工具によって窪ませている。

94は扁平な花崗岩河原石を利用した石錘である。上端のみ刻目が施される。重量33.2g となる。95は砂岩質の金床石である。後述する羽口など鍛冶関連遺物とともに出土した。中央部には敲打痕跡があり、酸化鉄が認められる。

羽　口（95 ～ 100）

96 ～ 99はＡトレンチ鎌倉時代前後に埋没したと思われる第４層付近（野島・加藤・脇山・荒平2008、124頁、第５図）から出土した羽口先端部である。ともに棒状の円柱状工具表面に粘土を貼り付けて成形したようだが、孔表面に工具痕跡はみられなかった。96は先端部側で7.3㎝、折損部側でおよそ8.2㎝、孔2.6㎝の直径である。淡桃白色で砂粒をほとんど含まない緻密な胎土である。羽口先端部の熔損と被熱の状況から羽口の設置俯角は５～ 10度程度で、水平に近い状態で使用されていたものと思われる。97は先端部側で7.0㎝、折損部側でおよそ8.9㎝、孔2.7㎝の直径である。96とは異なり、直径１～２㎜程度の石英・長石を多量に含む淡褐色の胎土をもつ。端部の熔損と被熱の状況から羽口の設置俯角も96とは異なり、10 ～ 15度程度となる。98は大口径の羽口の破片である。直径10.0㎝以上になると思われ、鉄溶解用の送風管であろう。器表にハケ状工具痕跡が残る。99も羽口細片である。このほか、鎌倉時代前後の遺物を包含する土層から椀形鉄滓破片も出土している。

４．おわりに

丹後一宮である元伊勢籠神社は、天の橋立の北方、丹後半島の東海浜部にあり、千歳下遺跡とは阿蘇海と舞鶴湾を隔ててはるか対岸に位置するわけである。千歳下遺跡の西隣には「一宮」と呼ばれる小祠がある。難波野条里遺跡と千歳下遺跡はともに海によって隔てら

れた２つの「一宮」の近隣に位置し、古墳時代中期の海浜祭祀行為によって破棄された土器群を出土するといった共通項をもつ。これを単なる偶然とすべきではなかろう。想像をたくましくすれば、両者は宗像大社（辺津宮）と沖ノ島（沖ツ宮）の位置関係と同じような地理的状況にあるといってもよい。辺津・沖津の地理的状況は瀬戸内海の大木遺跡や高島岩盤山遺跡などにも認められることから、沖の小島や半島を渡海目的地に見立てた祭祀が実修された可能性を指摘していた（野島 2007・2009）。

先述してきたように、千歳下遺跡出土土師器は難波野条里遺跡祭祀遺構 SX200出土土師器と比較すれば、やや古い様相を持つと認識することができる。祭祀遺構 SX200から出土した須恵器には、TK208型式前後の高坏や瑕がある。共伴した土師器もほぼ同時期のものと考えることができよう。よって時期幅はあるものの、少なくとも千歳下遺跡の高杯などが使用・廃棄された時期はそれを遡り、全体としてみれば一部併行しているものと考えてよかろう。

現状の調査成果からすれば、本祭祀遺跡の形成時期は丹後半島に所在する３大前方後円墳の築造時期よりも新しくなるといえよう[(3)]。ただし、布留式期でも中相に遡る土器群が存在することも明らかとなった。山陰系二重口縁壺(70)や土師器器台(77)などが、千歳下遺跡の海浜祭祀の開始時期を示すものであるならば、巨大前方後円墳の築造期間に一部並行していた可能性もないとはいえないのではなかろうか。

今回の土器を中心とした概要の報告については、第２節高坏の事実報告および型式分析の項を松波静香､第２節磁器の項を松本達也が執筆した。そのほか第１～４節を野島が執筆し、松本と協議のうえ補筆、全体を調整した。出土地点やそのほかの点で訂正がある場合は、今後機会を得て行ないたい。

本報告は広島大学考古学研究室と舞鶴市教育委員会が提携して推進している共同研究『日本海をめぐる古代交流と海浜祭祀に関する研究』（研究代表者：古瀬清秀）および、広島大学大学院文学研究科で推進している『世界遺産･厳島の総合的研究』の科学研究費補助金（基盤研究（B)、課題番号20320103〈研究代表者：狩野充徳〉）による研究成果の一部である。共同研究が実現するにあたっては舞鶴市教育委員会吉岡博之氏のご尽力と寛大なご配慮があったことを記しておきたい。

また、千歳下遺跡出土土器の時期比定のために、京都府宮津市難波野条里遺跡や京丹後市浅後谷南遺跡などから出土した関連土器資料の比較検討を行なった。土器の観察とその比較検討を行なうにあたっては、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 肥後弘幸氏・岩松保氏・高野陽子氏に御便宜を図っていただき、多くの教示を得た。小池寛氏・中川和哉氏にも諸般ご協力いただいた。記して感謝したい。

最後に概要報告の作成にあたって、広島大学大学院文学研究科考古学研究室の学生が出土遺物の実測・石膏復原・着色・写真撮影を行なった。参加者を以下に記しておきたい。

松波静香・山手貴生・小林昂博・実盛良彦・辻村哲農・齋藤友紀・矢部俊一

注

(1) 検出遺構名等は、舞鶴市教育委員会が平成11年３月および９月の２度にわたって行われた現地説明会において配布された「発掘調査現地説明会資料」に依拠している。野島2007文献、野島・加藤・脇山・荒平2008文献、および野島2009文献を参照いただきたい。なお、今回の資料の紹介は、土器を中心とし、遺物写真等については今後の機会としたい。

(2) 色調は『新版　標準土色帖　1997年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修) を参照した。

(3) 昨年度紹介した鉄器からすれば、共伴する土器群がやや新しくなる印象を受ける。

引用・参考文献

石尾政信・引原茂治　2008 「難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第128冊、(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、53～92頁。

石崎善久・黒坪一樹・福島孝行　2000 「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊、(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、３～186頁。

寺沢　薫　1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊、奈良県立橿原考古学研究所、327～397頁。

野島　永　2007 「古墳時代祭祀遺跡における鉄の消費形態」『たたら研究』第47号、たたら研究会、1 ～ 20頁。

野島　永・加藤　徹・脇山佳奈・荒平　悠　2008 「海の祭祀遺跡―舞鶴市千歳下遺跡― (1)」『広島大学考古学研究室紀要』第１号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、121～144頁。

野島　永　2009 「祭祀遺跡において消費される鉄―鉄の価値をめぐって―」『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣、160～178頁。

森田　勉　1995 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集－』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、71～100頁。